

四錢トナリ、霰以下准之テ價ヲ増ス、

膳 大蒸籠 代四十八文

一そば 代十六文

一あんかけ 代十六文

一あられ 代二十四文

一天ふら 代卅二文

一花まき 代廿四文

一玄つぼく 代廿四文

一玉子とじ 代三十二文

一上酒 代四十文

〔近世事物考〕○蕎麥屋

蕎麥切商

そばうんどんは、寛永以後元祿の初迄は、皆菓子屋にて搾へたり、尤商ふ家も稀にて、下人など常に喰ふ事は少かりしなり、元祿の末に艸子に、二八の看板初て見えたれば、漸此頃よりそばうんどん商ふ家とては、別に出来たるなり、

〔嬉遊笑覽〕○昔は温飪を専らにして、蕎麥はかたはらなり、近時までも、そばやをうどん屋と稱へしなり、

〔人倫訓蒙圖彙〕○麵類賣 館飪蕎麥切を一膳切にさだめ、夜に入てになひありく、其外麵類は慳貪と號して、一膳の代五分切に是をあきなふ、大佛門前をはじめ、所々にあり、

壁ノ張紙及格子掛行燈○略 上ノ如シ、

アラレ バカト云貝ノ柱ヲ、ソバノ上ニ加フ○云、

天フラ 芝海老ノ油アゲ三四ヲ加フ

花卷 淺草海苔ヲアブリテ揉ミ加フ

シツホク 京坂ト同ジ

玉子トジ 雞卵トジ也

又鴨南蠻ト云アリ、鴨肉ト葱ヲ加フ、冬ヲ專トス、

又親子南蠻ト云ハ、鴨肉ヲ加ヘシ雞卵トジ也、蓋鴨肉トイヘドモ、多クハ雁ナドヲ用フルモノ也、○中略